ダイ・ルー族住居の基本的な架構形式について

雲南省ダイ・ルー族住居の伝統形式に関する研究 その1

THE BASIC STRUCTURAL STYLE IN DWELLINGS OF DAI-LU

A study on dwellings of Dai-Lu in Yunnan Part 1

高野 恵子*

Keiko TAKANO

A minority group Dai-Lu has wooden settled dwellings. Recent years their dwellings have several varieties of style, however it is possible to reconstruct the typical dwelling tentatively from the common building techniques seen in the modern dwellings. This supposed basic structural style is;

- 1) The 14 Main Pillars (Irigawa-bashira) make a rectangular area which is two bays by five. They receive 6 beams and 2 purlins.
- 2) Two ridge-bearing pillars (Munamochi-bashira, supporting a ridgepole directly) stand at the center of the rectangular interior.
- 3) The 14 perimeter pillars (Gawa-bashira) surround the three sides of the rectangular area, and 8 thin poles (Kabe-tsuka, supporting outside-walls) stand along the rest of the side.

KeyWords : Dai Lu, settled dwelling, structural style, Irigawa-Bashira, Munamochi-bashira, Gawa-bashira

ダイ・ルー族, 高床式住居 架構形式, 入側柱, 棟持柱, 側柱

1. はじめに

雲南省南部に居住するダイ・ルー族^{*1}は、東南アジアに広く分布するタイ族の1枝族である。水稲耕作に結びついた各種儀礼や季節祭など、タイ系諸族の古い習俗をよく残す民族として、様々な分野で研究が為されてきた。彼らの居住する高床式住居は、東南アジアから東アジアに広く分布する高床式建築との関連において注目され、特に日本の建築学分野では、日本との関連において近年注目を集め、多くの紹介や研究が為されている。

建築学分野での研究では、現在一般的に見ることのできる住居形態を取り上げるが、平面、構造形態の歴史的変遷に関する考察はほとんど行われていない^{*2}。西双版纳一帯では、1940年代末より、中国の近代化に伴う政治的・経済的な変動が起きたことが報告されており^{*3}、また本研究の調査地周辺では、1970年代初頭に大規模な住居建造ラッシュが起こったと伝えられる^{*4}。現在見ることのできる住居のほとんどが、近代化以降、特に1970年代以降に建造されたものであり、それ以前の住居形態から変化したものであると捉えるべきである。

本研究はダイ・ルー族の住居の伝統形式とその歴史的変遷を探ることを目的とするが、本稿では、近代化以前（特に1970年代の建造ラッシュ以前）に存在した一般的な住居形態を類推する手がかりと

して、架構形態に注目し、考察を進める。現在見ることのできる住居の架構形態を分析し、近代化以前に成立していた、基本となる架構形式を明らかにしようとするものである。

2. 対象地域と住居の一般的状況について

本稿で対象とする勐罕鎮^{*5}近隣の村落では軸部、造作共に木造で、屋根を入母屋造瓦葺きとする高床式住居が一般的^{*6}である。床下は倉庫や家畜小屋として用いられ、人が生活の場とするのは床上に限られている。床上は大きく3つの区域に分けられる。1つは階段を登った位置にある半外部空間（以下庇空間）で、ここでは日常的な作業を行う。2つは庇空間から入る居室で、中央に囲炉裏が置かれ、日常生活の中心の場となる。3つは居室から入る寝室である^{*7}。居室と寝室は、概して棟木の直下に桁行方向に立てられた仕切り壁で区切られている。

現在見られる住居のほとんどは建造されてから20年以内のものである。一般に住居の寿命は短く、約10年ほどで建て替えられ^{*8}、その際に古い住居を解体し、その古材をできる限り転用する場合が通例である^{*9}。建造後30年以上を経た住居は珍しく、一つの村落に数棟しか見受けられない上に、近年の建造では既存住居の平面、架構に様々な変更を加える事が多い^{*10}。近代化以前に建てられた住居を

* 関東学院大学工学部建築学科 非常勤講師

A Part-time lecturer, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kanto Gakuin Univ.

発見することは困難だが、古材を多く転用するため、前身住居の形態を比較的容易に推測できるものは多く発見される^{*11}。

現在最も多く目につくのは、大小2つの矩形を組み合わせた平面を有し、大小2棟の入母屋屋根を架けるものである^{*12}。そのほとんどはここ10年ほどの間に建てられたもので、2棟住居に住む家族の多くが、以前は1棟の住居に住んでいたと伝える。1棟住居は現在でも多く見られ、中には建造後数十年を経たものも発見される。

本稿では架構形式の検討のため、最も単純な架構形態を有する1棟住居に注目し、曼炸^{*13}の2村落に建つ住居8棟(表1)を採り上げ、分析を進める。

3.用語等について

本稿で用いる住居の資料は、全て現地調査で得られたものに基づいている^{*14}。分析対象として採り上げた住居は、村名+番号で表記する。村名は現地の漢字表記に従い、番号は調査時に任意に振り付けた。

部材名はなるべく日本建築の用語に従い、日本語化したものを用いる。室名は現地名称の意味を基本に、中国語文献で用いられる用語を参考として日本語化したものを用いる^{*15}。

4.古い住居の概要

曼炸20は建造後50年以上を経たもので、現在まで架構解体を行っていないと伝えられ、実際に解体の形跡が認められない貴重な例である(図1・図2)。

その架構は、棟持柱^{*16}の外側に入母屋の妻が取り付け、その周囲を背の高い入側柱^{*17}が取り巻き、その外側に側柱^{*18}が巡る、上屋・下屋構造となっている。下屋外の二方には更に庇が付設される。

入側柱は礎石から上屋梁までの一材で、床下で繋ぎ貫(タン・ホー)、大引貫(キャン)で縦横に連結され、高床上方に内法貫(タン・ホー)^{*19}が入る。柱頭は上屋梁(クー・ロン)、桁(ビエ)を載せる、折置き組と同様の架構となる。6本の上屋梁のうち、図中3~6筋の上屋梁は扱首(ヨウ)を載せ、更に3,6筋の上屋梁の内面に接して棟持柱が立てられて、扱首と棟持柱とで棟木を支える。3,6筋に立つ扱首の外面に妻壁(ゾウ・フー)が吊り下げられる。

梁行中央の2~7筋の入側柱間に敷居(グトゥップ・ビン)が置かれる。その上に、入側柱筋よりも梁巾分^{*20}内側へ偏って棟持柱が立

つ。敷居上の棟持柱間に設けられる覆室と居室の仕切り壁(ファ・ソム)^{*21}は、上端を棟持柱間に渡された細い貫状の材^{*22}で留められる。敷居直下には入側柱筋に床束が立てられる。床束の上端の大引貫は、頭貫様の収まりになっているため、敷居は床束と大引貫で支えられる。床束は周囲の入側柱を貫通する繋ぎ貫と大引貫によって連結されている。

側柱は入側柱より背が低く、礎石から側桁(ビエ・タオ・ツァオ)までの一材である。床下で入側柱を貫通する繋ぎ貫、大引貫が通され、高床上で側柱頂上の下屋繋ぎ梁(ホワイ・グオ)によって入側柱と連結する。側柱は入側柱の四周を巡らず、入口側、奥、居室側の3方に立つ。側柱外面に接して大引貫の上に床縁材が置かれ、その上に上方が外へ傾いた(以下外転び)細い壁束が立つ。壁束は、小梁で側柱に繋がれ、軒桁と外壁を支える。外壁は床縁材上に立ち、上端は軒桁内面で留められる。側柱の立たない覆室側では、大引貫の上に置かれた床縁材の上に、前述の細い壁束柱と同じ材が立ち側桁と外壁を支えるが、ここでの小梁は入側柱に太入れで繋がれる。外壁の上端は側桁の内面で留められている。覆室側の軒桁は、同様の細い壁束を立てて支えられる。この壁束は、床縁材の外側、入側柱から庇柱へ渡された貫状の材の上に立つ。ここに壁は入らない。

屋根は上屋・下屋を一つとし、庇屋根は独立して切り下げる。平側は力垂木(ルン)を上屋梁上に立てられた扱首の中程より側へ向かって架け、上屋桁と側桁に載せる。その上に棟から薄いゴビラの垂木(ゴワン)を架けるため、屋根は扱首勾配よりも緩い勾配で、屋緩みを持つものとなる。妻側では扱首の中繋ぎと妻壁の前包を兼用する材(ヨウ)から側桁へと力垂木を架け、その上にゴビラの垂木を載せる。隅木は前包材に上端を架ける。屋根は隅で振れ隅を起こすため、側桁の高さは梁行桁行で微妙に異なる。

柱の形状は、入側柱、側柱、棟持柱が八角柱、庇柱は角柱となっている。径はおおよそ入側柱根元で30cm、頂部23cm、棟持柱間の床下に置かれる床束は入側柱と同形、同寸である。側柱も先へ向かって細くなり、根元で25cm、頂部で18cmとなる。棟持柱は径が一定で約18cm、庇柱も上下にわたり径が一定であるが、柱毎のばらつきが激しく、8cm~15cmとなっている。各柱は断面形状、寸法ともに、明確に区分して用いられていることが窺われる。

以上をまとめると、曼炸20の柱配置は、2本の棟持柱の周囲を14本の入側柱が取り巻き、入側柱は6本の上屋梁と2本の上屋桁を支える。更にその外側3方に計14本の側柱が巡り、残り1方には外壁を支えると同時に側桁を支える細い壁束が8本並ぶものである。

5.入側柱について

上述の曼炸20は入側柱が14本立ち並ぶが、同様の例を他に見ることは困難である。ここで近年に建造された住居の入側柱配置に注目し、比較を行う。

曼炸28(図3)は新築の例で、ほとんどの入側柱が立たない。居室側は二-2, 5のみに入側柱が立ち、二-2~5, 二-5~8には曼炸20に見られない太い材が入れられている。二-2~5には太い指物材が水平に架けられ、両端が入側柱に挿される。指物上の二-3, 4には入側柱上部と同様の径と形状をもった短い束が立ち、上屋梁を支える。一方、二-5~8に架けられた材は7筋までは水平だが、そこから“へ”字形に下方へ折れ曲がって端部を側柱に直接載せる。ここでは前者を指物

図1:曼炸20架構概念図

と呼称し、後者二-5~8の材は同時に側柱との繋ぎ梁の役割も有するため、大梁と呼ぶ^{*)3}。また指物上に載る、入側柱と同径、同形状の短い束を短束と仮称し、二-2~5の水平の指物を入れる技法を①、二-5~8の大梁を入れる技法を②として論を進める。

この住居は曼炸20とは異なり棟持柱を持たず、敷居、居室・覆室の仕切り壁が棟木直下よりも覆室側に後退している。同時に、覆室側に入側柱が立たず、側柱が立つ。棟木は曼炸20と同様に上屋梁上に置かれた扱首で受けられる他、3,6筋の上屋梁上に立つ棟束で支えられる。棟木筋からずれた仕切り壁の立つ又ハ列では、又ハ4,5を除き、入側柱と同形状の柱が立ち、壁を支えると同時に上屋梁を支える。また又ハ3~6に技法①で指物が渡され、その上の又ハ4,5に短束が立って上屋梁を支える。この短束と又ハ列の入側柱^{*)4}には、覆室側へ梁行方向に、技法②で大梁が架けられる。大梁の上口列に、二列、又ハ列で見られるものと同様の短束が立ち、上屋梁を載せる。従って入側柱本数が少ないながらも、上屋梁は曼炸20と同様に6本が数えられる。

近年の新築である曼嘎16(図4)では、二-6、口-3に入側柱が立たず、二-5~7、口-2~4に技法①で指物が入られる。曼炸28と同様に指物上に短束を立て上屋梁を載せるため、上屋梁は同様に6本が数えられる。

曼炸34(図5)は既存住居を一時解体して再建したもので、二-4,6、ハ-7、口-6に入側柱が立たない。また曼炸20で棟持柱の立つハ-3,6に入側柱と同様の柱が立って上屋梁を載せ、上屋梁の上に扱首と共に棟束が立てられる。二-3~7、口-5~7には技法①で指物が渡され、短束を立てて上屋梁を受ける。二-5には入側柱が立つが、その上端は上屋梁まで達せずに二-3~7に渡された指物を直接支える。その上に立つ短束は、表面の材色や鉋痕^{*)5}より、かつては1本の入側柱であったものを再建にあたって切断し、用いたものと考えられる。またハ-6~8にも技法①で指物が渡されその上に短束を立てるが、ここでの指物は側柱までの水平材として用いられ、背の高い短束を載せる。上屋梁は曼炸20と同様に6本を数える。

いずれの例でも短束は必ず入側柱上部と同じ径を持ち、入側柱と同様に八角形に整形されている。古材を多く転用している曼炸34は当然としても、新材を用いる曼嘎16および曼炸28においても、歪みを持つものの、短束を八角形に整形している点は、入側柱と短束との深い関連を示唆していると考えられる。また梁行柱筋で、両側の入側柱が共に立たない場合であっても、入側柱の立つべき位置に短束を立てて上屋梁を載せ、上屋梁を常に6本としている^{*)6}。このことは、本来、入側柱が1列に6本並ぶ架構が基本的な形式であったことを示しており、従って短束は、抜き取られた入側柱の痕跡であると捉えることができる。

短束を入側柱の痕跡であるとするれば、曼炸34の梁行中央間ハ-7短束も、入側柱の痕跡と考えることができる。また居室・覆室の仕切り壁が覆室側に偏る曼炸28では、仕切り壁が偏った事に伴って柱列が又ハ列に移動したものと捉えられ、又ハ-2,7は入側柱、又ハ-3,6は曼炸20に見る棟持柱の痕跡であると考えられる。更に短束の立つ位置の床下には、必ず床束が立てられている点からも、入側柱の痕跡を認めることができる。

以上より、近代化以前に遡ることのできる基本的な架構形式は、入側柱が14本立って矩形を描き、6本の上屋梁が架けられるもので

あると考えることができる。

6. 棟持柱について

現在見られる住居で、棟持柱を有する例は稀であり、棟持柱や棟束を全く持たないものが大半を占める。特に棟持柱を持つ例は、現在29棟の資料の中で3棟(曼炸20、曼炸27(図6)、曼嘎16)に過ぎない。いずれの例も入側柱の形状より、基本となる架構形式がよく現れていると考えられる住居であるが、ここに見られる棟持柱の存在が、より古層に遡る形式か否かは疑問が残る。不明な点も多いが、現時点で確認される範囲での棟持柱に関わる問題を整理すると以下のようなになる。

①曼炸20等の棟持柱は、扱首構造との併用であるため構造的に不必要なものである。また、棟持柱が床束に載せられた敷居上に立てられた束柱の形状を取り、更に入側柱に置かれるような護符布^{*)7}が置かれなことから、棟木を支える独立柱としての棟持柱という、本来の棟持柱の構造的、形態的な形式が形骸化したものであると捉えることも可能である。

②同じ棟持柱を持つ建造物として、村落に建つ寺院仏殿^{*)8}が挙げられる。仏殿の屋根架構は、小屋束と小屋梁を重ねた小屋組架構であるため、棟持柱もしくは棟束は必須である。小屋組を用いる寺院仏殿と、扱首構造を持つ住居とを同列で語ることは困難である^{*)9}が、住居の棟持柱は、寺院の棟持柱との関連を思わせる。

③棟束は比較的頻繁に見られ、特に居室と覆室の仕切り壁が偏っている住居では頻繁に見られる。曼炸20のように棟持柱が立つ例と比較すれば、曼炸28などに見られる棟束は、棟持柱の形骸化したものと捉えることができる。棟束は、棟持柱のあるべき位置に架けられた上屋梁の上に立てられるが、同じ梁上に扱首が立つため、束は内側へ後退せざるを得ない。最も頻繁に見られるものは、棟束に15×7cm程の材を用い、扱首の繋ぎ材内面ぎりぎりに立てるものである。この時の棟束は角材が用いられており、入側柱を抜き取ったときの短束が常に八角形に整形されているのに比べ、「柱」としての形状が希薄である。

以上より、本来の形式では棟持柱が存在していなかった可能性が指摘できるが、一方相反するように、

④棟束の形状が柱としての形状を有していない例があると同時に、意識的に棟持柱の形態を残したと考えられる例も存在する。近年の再建である曼炸34では上屋梁下に入側柱と同様の形状を持つ柱が立ち、上屋梁上には八角に整形された細い棟束が立つ。ここに用いられた柱、棟束はともに新材であると判断され、おそらく1980年の再建時に挿入されたと思われるものである。

⑤曼炸28に見られる棟束は薄い束であるが、又ハ3,6に立つ入側柱は棟持柱の痕跡と見做すことができる^{*)10}。

以上より、ダイ・ルー族の住居にとって、棟持柱の存在が、古い時代にまで遡ることのできる架構形式であることには疑問が残る。しかし現存する住居から考察する限り、2本の棟持柱が曼炸20と同様の形態で立つものが、ある時期に普遍的であったことは否定できない。曼炸20および27の建造年代から推定して、1940年代の近代化以前での基本的な架構形式は、2本の棟持柱を持つものであり、この形式が現在の住居の直接の基本形であると考えられる。

7. 側柱と外壁について

現在村落に見られる住居のほとんどが、外壁を外転びとする^{*31}。その壁は、大引貫上に置かれた床縁材の上に立てられた壁束によって支えられる。壁束は柱と小梁によって連結されるため、壁束は柱筋に立つ。

曼炸20では、入側柱の3方に側柱が14本立ち並ぶ。側柱のある位置では、壁束は側柱から伸びる小梁と力垂木、軒桁で支えられ、大引貫の上、側柱の外面に接する約10cm角の床縁材の上に立つ。寝室側の側柱の立たない位置では、壁束は入側柱から伸びる小梁と力垂木、側桁で支えられるが、壁束の長さは側柱の立つ位置にある壁束と同じであるため、外転び勾配が変化する。壁束の立つ床縁材は、大引貫の上に直接置かれる他、端部は梁行方向の床縁材に挿される。

一方近年の新築である曼炸28では、側柱は計18本で四周を巡り、ホ-3のみに立たない。外壁は曼炸20と同様、床縁材の上に立つ壁束によって支えられ、上部が外へ傾いている。壁束上端は側柱から伸びる小梁と力垂木、側桁で支えられ、側柱のないホ-3では力垂木と側桁で上端を支える。床縁材はいずれも側柱外面に接し、桁行方向の床縁材は大引貫の上に直接載り、梁行方向の床縁材は桁行方向の敷居の上に端部を載せる。

曼炸20、曼炸28の側柱と外壁との関係は同じものである。曼炸20では、寝室側の桁行方向の壁の収まりが、側柱がないことによって他と異なる収まりとなっていることに對し、曼炸28では四周とも同一手法で壁が立てられ、合理的であるとも扱えられる。しかし入側柱を省略しても床束と短束が入側柱の痕跡を示していたのに対し、曼炸20の寝室側の側柱筋には側柱の痕跡が認められず、側柱が四周を巡る形態が基本的なものであるとは断定できない。

寝室の使い方に注目すると、曼炸20では仕切り壁から入側柱の間に、入側柱を枕側として布団を敷き延べ、入側柱より外側には私物を入れた長持を置く。曼炸20と同様寝室内に入側柱の立つ例では、全て同様に入側柱内側に布団を敷き、入側柱外側には長持や箆箆を置く^{*32}。

一方仕切り壁が偏る曼炸28では、仕切り壁から側柱の間一杯に布団が敷かれ^{*33}、"へ"字形の大梁上に立つ短束の位置による生活空間の使い分けは認められない^{*34}。これは入側柱の消失によって布団を敷き延べる範囲の指標が失われ、その結果、側柱を入側柱のように取り扱うようになったためと扱えられる。また、仕切り壁～側柱(外壁)間を一杯に使えるようになると、充分な部屋巾を確保することが容易となり、居室・寝室の仕切り壁が寝室側へ偏ることを可能としたのであろう。その結果、大梁の室外側端部を堅牢に支えるために側柱が必要となったと考えられる^{*35}。

従って、曼炸28に見られる寝室側の側柱は、寝室内に入側柱を省略したために必要となった柱であると理解される。曼炸20に見られる入側柱の3方に側柱が14本立ち、1方は8本の壁束で側桁を支えるものが、現在の住居から推定される、近代化以前に遡ることのできる基本的な架構形式であると考えられる。

8. まとめ

以上より、現在見られるダイ・ルー族木造住居の基礎となった基本的な架構形式は、2本の棟持柱を有し、その周囲を14本の入側柱が取り巻き、更にその3方を合わせて14本の側柱と8本の壁束が取

り巻くという上屋・下屋構造であると考察される。曼炸20にこの架構形式が最も良くみられ、近年の新築もしくは改築による住居の架構形態は、曼炸20のヴァリエーションであり、本稿で明らかにした基本的な架構形式を簡略化したものと捉えることができる。

架構形式が大きく変化した直接の契機として、1970年代の建造ラッシュが考えられる。ラッシュ以降に建造された新築もしくは改築住居の中に、以前の建造である曼炸20と同様の特徴が色濃く現れていることは、曼炸20に現れる架構形式が、意識的に保持されていたことを示している。従って、本稿で明らかにした、曼炸20に見られる架構形式は、当時に於ける伝統形式であると捉えることができる。

本稿はダイ・ルー族木造住居の、近代化以前に遡る架構形式について考察を試みたが、より古層に遡る架構形式を示唆するものとして、棟持柱の問題や、現在でも村落に見られる竹を多用した住居の検討などが挙げられる。また、住居全体の伝統形式を明らかにするためには、室内外の様々な装置と平面形態に関する調査、検討が必要である。更に、近年の再建もしくは新築による平面変化の形態と、それに伴う生活形態の変容など、近代化に伴う変化を分析することも重要である。

以上のように、ダイ・ルー族の住居形式を理解する上で残された課題は多く、資料の充実を計ると共に考察を深め、住居の伝統形式を明確にしていきたい。

註；

^{*1} Thai Lu, または Dai Lu. 中国表記「傣勐」。タイ、ラオス、ベトナム、ビルマ・シアン州、アッサム、中国南部に広く分布し、言語的にはタイ語族を構成するタイ系諸族の一。傣(グイまたはタイ)族は中国雲南省を中心に居住するものの総称で、ダイ・ルー、ダイ・ナー、ダイ・タイ、ダイ・ドンなどと自称する集団に分かれる。主として河谷・山間盆地に村落を形成し、水稻耕作に従事。住居は高床式。上座部仏教を信仰する傍ら、精霊信仰も根強く存在する。神話・伝承・叙事詩なども豊富で、バーリ語を基に作られた民族文学を持つ。ダイ・ルー族は雲南省、貴州省などの中国西南部からタイ、ラオスにかけて広く居住するが、その中心居住地は雲南省南部、西双版纳傣族自治州。首都景洪(ジンホン)。西双版纳はタイ語で「シッパ・ソーン・パン・ナ」と発音し、「12・千・稲田」の意。「パン・ナ」は一つの行政単位で勐(ムン)と同義。史料によれば、宋代に南詔国、大理国の管轄を受けながら部族連合国家、景龍金殿国(勐国、1180～1954)を形成し、その後中国王朝の間接統治下に置かれると共に、北部タイのラーン・ナー王国、北部ラオスのラーン・サーン王国と緊密な関係を持ち続けた。ダイ・ルー族を含むグイ族の歴史、文化、生活一般については多くの報告が為されており、概説的なものとしては、江応梁：『傣族史』、四川民族出版社、1984/張公瑾：『傣族文化研究』、雲南民族出版社、1988、などが挙げられる。

^{*2} 雲南省周辺の諸民族を包括的に扱い、比較考察しながらグイ族を取り挙げるものとしては、王翠蘭・陳謀徳主編：『雲南民居』、中国建築工業出版社、1986/若林弘子：『高床式建物の源流』、弘文堂、1986など。グイ族住居を中心として取り扱うものには、雲南省建築工程設計院少数民族建築調査組：『雲南辺境の傣族民居』、『建築学報』1963年第11期/王加強：『伝統傣族住居設計初探』、陸元鼎主編、『中国伝統民居與文化－中国民居學術會議論文集』、中国建築工業出版社、1991/曾文照：『中国雲南傣族民居之実地研究』、国立成功大学建築研究所碩士論文、1991、など。いずれも現存する住居形態を取り挙げ、グイ族の高床式住居の特徴を分析するが、平面形態および構造形態上の復原的考察は行われていない。若林弘子1986および曾文照1991では、住居の設計寸法および設計方法に言及するが、現存する多棟住居の各部寸法を指摘するに留まり、復原的考察を行うものではない。また、しばしば青銅器文化(滇・ドンソン文化)遺物に見られる住居図像資料との関連が言及される(若林弘子1986、劉崇：『西双版纳傣族民居的分析與借鑑』、前出：陸元鼎1991、など)が、年代ギャップが大きすぎ、また青銅器文化の担い手がダイ・ルー族の直接の先祖である確証も得られないため、いささか直感的な論であると言わざるを得ない。建築学分野での既往研究の動向は、浅川滋男：『学会展望－中国の民家・住居史研究』、『建築史学』28号、1993、で網羅的に概説されている。

^{*3} 《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員会編：『傣族社会歴史調査 西双版纳之二』、雲南民族出版社、1983/朱德普他：『勐罕傣族社会状況調査』、『民族問題五種叢書』雲南省編輯委員会編、『傣族社会歴史調査 西双版纳の八』、雲南民族出版社、1985、他。また1984年に勐罕近郊に大量の漢族が開拓入植するなど、変動は続いている。

^{*4} 現地調査での聞き取り調査による。総じて住居の建造年代は、家人によって極めて良く記憶されている。1970年代に建てられた住居では、妻壁に装飾と共に凸き記されている例が多く見受けられ、建造年代を確認することが可能である。

^{*5} 景洪から南西へ30km進んだ町で、勐罕盆地の中心都市であり行政府が置かれる。通称橄欖坝(ガランプ)。メコン河に面する。勐罕盆地には約70の村落が点在するが、本稿では勐罕から東へ5kmほどの平地に立つ集落群を取り上げる。大きく南へ蛇行したメコン河と、北へ円弧を描く湖に囲まれた平坦な土地で、点在する5つの村落が縦横に走る通路で繋がれている。なお「勐(ムン)」は世襲性の首長によって統治される政治単位、「曼(マン)」は村の意。

^{*6} 他に軸部のみ木造で葺葺、架構や造作に竹を多用する住居も若干見られる。軸部架構、屋根形状など類似点が多いものの、規模が小さく側柱を持たない等、基本的な相違点も多い。このタイプの住居に関しての考察は後に譲りたい。

*7 註15参照

*8 4カ村、9名の木工からの聞き取りによる。竹を多用した住居の場合はおよそ3年とされる。建て替えの時期にはその家の金銭的状況が大きく影響していると思われる。建て替えの契機は家主の交替や結婚等の家族構成員の変化によるものと、腐朽や歪みなどの構造的な問題によるものに大別できる。

*9 前身住居の古材だけでなく、不要となった他の住居の古材も利用される。ほとんどの家では数年後の新築に向け少しづつ材を貯蔵していくが、その中にはかなりの割合で古材が混入している。裕福な者の場合は古材を用いることをあまりせず、解体して出る古材を売り払うこともあるという。本来ダイ族は周辺の森林より自由に木材の伐採ができたが、文革後森林は国有林とされ、伐採は困難となった。また中国全体で木材が高騰しているために新材が手に入りにくいという状況も影響していると思われる。

*10 聞き取りおよび実測調査による。再建時に床面積の拡大を行う例が頻りにみられるが、家人によれば「狭い」という。床面積の拡大の結果、多棟住居となる例が大半である。

*11 1棟住居、多棟住居ともに発見できる。曼炸27、曼炸34等は1棟住居の例。本稿では取り上げないが、曼春31、曼春01など(表1参照)多棟住居の例も多くみられる。

*12 およそ80%が2棟形式の住居で、既往研究で取り挙げられるのはほとんどがこの形式である。屋根形状は棟を平行に並べるものと、L字型に直行させるものとが見られる。他に3棟住居も見られる。1棟住居は、村落によって割合がかなり異なるが、10~20%程度存在する。なおダイ・ルー族の住居では、平面の形状と屋根形状とが密接な関係にあり、屋根形状から平面形状を類推することが容易である。

*13 村人からの聞き取りによれば各村沿革、規模は以下の通り。

曼炸：成立時期は不明だが、現存寺院(1982年再建)の前身建物はかなり古いものであったと伝えられる。現存最古の住居(曼炸20)は建造後50年以上を経るという。1993年現在、46戸、人口244人。

曼嘎：成立時期は不明。もと漢族の植民地で、漢族の移動後、ダイ族が入植したという。入植より1~2世代が経過。1993年現在、23戸、人口120人程度。

*14 1991.3~4、1993.3~4、1995.2~3に実施。1996年1月現在での住居平面実測資料は5村29棟。このうち本稿で取り挙げる1棟住居は4村10棟(造築再建を受けて2棟住居となった2例を含む)。詳細は表1参照。

*15 現地名称は聞き取り調査で得られたもの、中国語名称は前出、王翠蘭・陳謀徳1986を基本資料とする。曼炸20(図20)に当てはめれば、イ-2~ハ-8を寝室(ナイ・臥室)、ハ-3~ホ-8を居室(堂屋)、ハ-1~ホ-3を底部屋(ホン・前廊)、矩体外の居室側に取り付けられる水場は露台(ジャン・晒台または涼台)。()内はダイ・ルー名・中国名。なお居室に相当するダイ・ルー語はホ-8、ハ-3~ニ-6をノン(囲炉裏空間)、ハ-8~ニ-8をナ・パン(座敷空間)、ニ-1~ホ-8をシェー(作業空間)と、それぞれの領域を明確に区分する装置を持たず、柱位置を手がかりとした緩やかな領域設定を行う。それぞれの異なった役割を担うものの、日中の生活に用いる空間である点で共通すると共に、壁の位置、架構形態から見れば、寝室に対応する一つの連続した領域であると考えることができる。本稿では架構形態について論を進めるため、上記3空間を一つの領域であると捉え、寝室に対して「居室」と呼称する。詳しくは以下を参照。高野恵子：『雲南省西双版纳のダイ・ルー族住居に関する研究』、『日中伝統民家・集落シンポジウム論文集』、1992/高野恵子：『雲南省ダイ族の住居に関する研究その1』、『日本建築学会大会学術講演梗概集F』、1993/菅原頼他：『住居語意からみたダイ族住居の伝統的空間構造(その1,2) - 西双版纳ダイ族の住居・集落に関する研究 -』、『日本建築学会大会学術講演梗概集E-2』、1995。(答える者によって若干の名称差異が出ることは、本研究調査でも菅原他1995でも確認されている。また露台を「ツァン」と記述するなど、聞き手の違いによる日本語表記に差異が見られる。本稿では筆者の用いてきた呼称を優先して用いる)

*16 サオ・ダン(柱・違い)。菅原他1995によれば、サオラン(柱・重要)。入口側ハ-3をサオラン・ノック(外の)、奥側ハ-6をサオラン・ナイ(内の)と呼ぶという。

*17 それぞれで名称が異なる。ロ-2=サオ・ジェン・ベイ・ノック(柱・終・?)またはサオ・ティン・ダイ(柱・階段)、ロ-5=サオ・ナン(男柱)またはサオ・ディウ・ラ・ヘン(柱・神・家)、ロ-7=サオ・ジェン・ドゥン・ホー(柱・終・?)またはサオ・ハ・クブ(柱・中)、ハ-2=サオ・ガング・ベイ・ノック(柱・中央・?)、ハ-7=サオ・ガング・バ(柱・中央)、ニ-2=サオ・ホイ・モン(睡柱)、ニ-5=サオ・ファン(家魂柱転じて女柱)、ニ-7=サオ・ジェン・ナ・パン(柱・終・面・窓)またはサオ・ロン・トウ・イ・ホ(柱・龍・?)、以上の8本には柱頭に護符布が置かれる(イェン・バイ・サオ。護符布は赤白2枚あり赤は~ハム・ビヤン、白は~ハム・ハオ)。その他の柱はハ-2,7の柱と合わせてサオ・ガング・バと呼称される

場合もあるが、無名であるともいう。各入側柱の名称は、ロ-5、ニ-5(家中で最も大事とされる)以外は答える者によって混乱する。若年層ではほとんど名称を知らない者もかなりおり、伝統の衰退を伺わせる。サオ・ナンとサオ・ファンにまつわる儀式等については朱徳普：『景洪傣族祭神状況調査』、『民族問題五種叢書』雲南省編輯組編、『傣族社会歴史調査 西双版纳之九』、雲南民族出版社、1988、に詳しい。

*18 一般的にはサオ・ジェン(柱・終)と呼ぶという。他にも名称があるようだが現時点では未整理。サオ・ジェンという呼称の正確さ也未確認である。

*19 この3材はいずれも貫の形態を取り、入側柱、側柱を連結するものである。繋ぎ貫と内法貫はどちらもタン・ホーと呼ばれ、原義は「繋ぐ・貫」。前者は床下の大引貫の下で桁行方向に入れられるもの、後者は床上の柱頭部に近い部分で、桁行、梁行両方に入れられるものであるため、現地名が同じながら、ここでは違う名称を用いる。大引貫(キヤン)は、床直下に梁行方向に入る貫で、床板下の根太と、後出の敷居(グトップ・ピン)を直接受ける。原義は不明であるが、材の役割を重視して「大引貫」と呼称する。

*20 およそ入側柱径半分に相当する。

*21 「囲む・覆る」の意。

*22 繋ぎ貫、内法貫と同じくタン・ホーとされるが、構造材としての意味をほとんど持たず、材の形状も繋ぎ貫、内法貫と異なる。別名の可能性もあるが現時点では不明。

*23 両者とも、固定した現地名称はない。

*24 棟木の位置からずれるため、厳密には入側柱とは呼べないが、同じ形状の部材を用いているため敢て入側柱と呼ぶこととする。

*25 室内に囲炉裏を持ち、日常的に火を焚くために、材の表面には煤が大量に付着し、材の新旧の判別は容易である。また材の整形加工は主に鉋を用い、チョウナのような切痕を表面に残す。加工は目分量で行われるためばらつきが激しく、そのため切痕の割合は材の復原は比較的容易である。

*26 同様の例はごく一般的に見られる。1棟住居では、曼炸28のように居室・寝室仕切り壁が寝室側に偏ったものと、曼嘎34のように、基本的な平面形状が曼炸20と同じものの2種類が見られるが、いずれの場合も技法①②で短梁を立て、上屋梁は6本を数える。また2棟住居では、完全新築のもの、既存住居を大棟として小棟を造築したもの2種に分かれるが、どちらの場合も大棟の上屋梁は6本を数える。

*27 註17参照。9名の木工からの聞き取りによれば、棟持柱は「特別な柱」であるため通常の入側柱と同様に扱わないという。

*28 ヴィ・ハーン。主屋は梁行2間桁行5間以上(奇数間が多い)の縦深平面を有し、柱壁上に立つ太い主屋柱は切妻屋根を支える。屋根架構は小屋組で、急勾配、強い屋簷を持つ。棟持柱の位置は、住居で入側柱列の内側に立つのに対し、仏殿では入側柱列上に立つ。従って入側柱と棟持柱は矩形を描き、その上部には切妻屋根を架ける。棟持柱がしばしば両脇の入側柱よりも内側へ偏って立てられる点は住居と同様である。側柱は入側柱と棟持柱の四周を巡り、切り下げられた庇が架けられる。

*29 9名の木工からの聞き取りによれば、寺院を建造する木工は住居木工から区別されており、数も少ない。調査地近隣の寺院木工は居らず、必要な時には遠方から呼び寄せるという。調査で出会った木工達は全て住居専門の木工であり、寺院の建造の手法や手順を尋ねても、知識のある者はいない。

*30 前項5. 入側柱について、参照。

*31 タイ族では外壁が外転びとなるのが一般的であり、複数の報告が為されている。深い軒、開口部の少ない形状と合わせて、陽光を遮り、通風を良くするための形状であると解釈される(前出・劉業1991)。なお外転びの壁が立てられるのは住居の3方、桁行方向の壁と居室奥の壁のみで、入口側の側柱筋には壁は立たない。入口側では入側柱筋に垂直壁が立てられる。

*32 曼嘎16、曼炸34、曼炸27など。仕切り壁側には、通路のために巾70cm程の空間が取られる。入側柱外に置かれる長持、箆等は衣類および貴重品の保管に利用。布団を桁行方向に敷き延べる例は、本稿で取り上げた調査地では認められない。

*33 曼炸20同様に、仕切り壁側に通路が取られ、外壁側には長持が置かれる。曼炸28と同様に仕切り壁が寝室側へ偏り、仕切り壁~側柱間が曼炸28よりも狭い曼炸21の例では、仕切り壁側に通路が取られるのは同様だが、布団は側柱までほぼぎりぎりに敷き延べられるため、長持は布団の横、側柱内側に置かれている。具体的な寸法は表1に記載。

*34 曼炸34、曼嘎16では寝室内の入側柱が部分的に省略されるが、布団は入側柱のある場所と同様、入側柱位置の内側に敷き延べられることと対照的である。

*35 曼炸28と同様に仕切壁が偏る平面を有する曼炸21、曼炸22、曼嘎11でも全く同様の手法を用いる。

図2: 曼炸20 平・断面図

図3:曼炸28 平・断面図

図4:曼嘖16 平面図

図5:曼炸34 平面図

図6:曼炸27 平面図

村名	No.	図版	建造年	再建年	人数	古材	棟持	仕切壁位置 (cm)は棟木 とのズレ	柱抜位置	寝室側 側柱	有効寝室 幅(cm)	仕切壁~ 短束(cm)	備考
曼炸	20	2	1910~ 1940		5	無	柱	中		無	300.0		部分補修は見られるが、軸部解体・変更は無し
曼炸	21		1985		5	有	角束	偏(97.0)	0列全,ニ-4,6,7	有	337.0	162.0	古材は前身住居のものかは不明
曼炸	22			1984	4	有	角束	偏(75.0)	0列全,ハ-4,6,7	有	407.0	236.0	前身住居建造年代不明,曼炸28に近似
曼炸	27	6	1937	1970	5	有	柱	中	ニ-6,ニ-2	無	275.0		材の補修は見られるが基本形態は変更せず
曼炸	28	3	1984		4	無	角束	偏(110.0)	0列全,ニ-3,4,6,7,ニ-3	有	398.0	229.0	底空間を高い腰壁で囲い、窓を設ける。又ハ-2,3,6,7に入側柱様柱
曼炸	34	5	1970	1980	6	有	八角束	中	0-6,ハ-7,ニ-4,6,ニ-2	無	310.0		ニ-5柱上部切断。ハ-3,6梁下まで入側柱様柱
曼嘖	11		1983		4	無	角束	偏(164.5)	0列全,ニ-4,6,7	有	344.0	184.0	
曼嘖	16	4	1983		4	無	柱	中	0-3,ニ-6,ニ-2,5,7	無	290.0		ニ列外側に底柱を立て室内化
曼春満	31	参		1970	4	有	無	中	ニ-4,6,ニ-4,6,7	無			1994に2棟造築
曼旁	1	考	20c前	1974	6	有	柱	中	ハ-7,ニ-6,7,ニ-2,4,5,6,7	無			1974に2棟造築

表1:対象住居リスト

(1996年2月29日原稿受理, 1996年8月22日採用決定)